

幼児の表現活動を育む保育者の養成 —指導法に関する実践的研究—

藤井 美津子

キーワード：保育内容、表現、造形表現、協同制作、実践事例

1. 【はじめに】

表現とは、目に見えない心の内部を外部に表し出すことである。「表現」には、表現する行為である「表し」と表現されたものである「現れ」の両方の意味が含まれている。

私たちは豊かな表現という言い方をよくするが、目に見える作品が立派であることを意味することではない。結果である「現れ」を豊かにすることが保育の場において目指すことではなく、過程である「表し」に着目し、その背景を含む全体を「表現」ととらえる視点が求められている。

子どもの表現は生活のあらゆる場面で見られる。保育者が子どもの表現を支えるためには、生活全般にわたって子どものありのままの表現（表出）・行為を大切に受け止めることが重要である。また同時に、保育者自身も子どもの表現に気づき・楽しみ・主体的に表現していくことが大切であり、表現を互いに楽しみ・喜び合える環境が子どもの表現を支えるための土台となる。

2. 【目的】

表現は身体を媒体とした場合「身体表現」、音や声は「音楽表現」、言葉は「言語表現」、ものや絵による表現は「造形表現」となる。これらの表現の源は密度につながって結びついている。

子どもたちの豊かな表現を育む人は、「きれいだね」と伝えたいような人である。保育者はまず、心豊かな「受け手」として傍にいななければいけない。また、安心して表せる「受け手」であるだけでなく、表現の「読み手」「表し手」としての感性もみがかなければならない。

学生たちにまず学んでほしいのは、表現の技法ではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有できる心と身体である。しかし、学生の多くが表現、とりわけ造形表現に対して苦手意識を持つ状況である。そのためには、表現に対するためらいや構えを克服することが第一歩である。自分の気持ちを率直に無理なく表現しつつ他者の表現も受け入れるという態度は保育者の専門性の一つである。

子どもたちの表現の誕生に立ち会い、育む人になるために、まず心を開き、表現を楽しむ人になってほしいと、事例や実践、協働作業や話し合いから授業を進めていった。

本研究は授業を通して学生の表現活動に対する変容を報告し、指導法に関する実践的研究をまとめたものである。

3. 【方法】

上記の目的を踏まえ、保育内容（表現・造形）では、2年生36名を対象に15回における授業を下記のように取り組んでいった。

- ① 一班 4～5 人でグループをつくり、グループのリーダーを当番制でまわし、準備や片付けなどがどの学生も主体的に取り組めるようにした。
- ② 実践授業について不安なく取り組めるように、授業内容を事前に伝え、授業内容が連続性のあるものや季節感を感じられるものにした。
- ③ 自分が表現するだけではなく、園児に対してどのような指導を行えばよいのかを、授業全体を通して学生自身に考えさせ、グループで話し合う機会をもった。
- ④ 制作した作品の結果ばかりを評価するのではなく、学生自身が制作する過程において心を開いて自由にのびのび表現できる環境を大切に、学生の感性をみがき、実践力につなげるようにした。

4. 【結果】

●実践事例 田村山のひみつ基地づくり

授業の概要

子どもたちの表現には、場とのつながりやものとの出会い、人との結びつき、自然との共鳴、かけがえのない時間、命とのかかわりなどが込められている。そんな子どもの世界に近づく特別なひとときを過ごすことで、誰もが表現の楽しさを感じてほしいと、学校の裏手にある田村山でグループごとにひみつ基地作りを体験した。材料は新聞紙とスズランテープ・ガムテープのみである。



授業の感想 （学生から）

- ・自然と一体になり、また自然の一部を借りたり利用して、グループで取り組む楽しさと、表現を「形」として現わす楽しさを学んだ。自然物の採取や発見で次へと繋がる制作や絵画を学び、季節の発見があった。
- ・初めて田村山に登って基地作りをしたが、最初はどうなるのか不安だったが、皆でいろいろと作っていくうちに楽しくなり、お互いのアイデアを尊重し合うことで、よいものが作れると学べた。子どもたちの発想は豊かだと思うので、一人一人の思いを大切にしていかなければと思った。
- ・身近にある新聞紙を使って囲いを造ったり、一枚一枚テープでつなげていく事で、一つの大きな紙になって班のみんなと「どうする？」と話し合い作り上げることで様々な発想を聞き、分かり合えたの

がよかった。山を登りながら、ドングリ、松ぼっくり、木の枝などを拾い、バッタなど自然を感じられて楽しかった。

- ・子どもに戻ったみたいに楽しめた。木や草や土や石、木の実など自然にふれる楽しさを知れた。今回は新聞紙で基地を作ったけど、ほかの素材をいろいろ試して基地を作ってみても、子どもたちは喜ぶだろう。
- ・自然の開放的な環境の中で、自らも開放的になり思うがままに組み合わせたり、他者の作ったものを受けて組み合わせたりしてグループで創り上げる楽しさを経験から学んだ。新聞紙は広げるだけでも壁や仕切りのイメージが持てるので、開放的な気分が相まって大胆に作ることができると思った。
- ・私自身も、小さい頃ひみつ基地作りはとても大好きだった。子どもたちは、みんな基地作りはワクワクドキドキして大好きだと思う。新聞紙など身近なものを使って、みんなと協力して楽しめるので、ぜひ現場に行ったら保育でもやりたいと思う。
- ・山に行く際の安全面や約束などを身をもって考え、学ぶことができた。ドングリや松ぼっくり、落ち葉に木の実など山にしかないものなどがたくさんあり、拾ったものでたくさん遊びに応用できると感じた。
- ・実際に木や石に触れたりして自然を感じ、その中でも小さいドングリに気づいたり様々な色形の葉を見つけられたりしたのは、先生が “たからものいれ” をグループに配っていただいたからだと思った。自然を子ども自身がつけられるような先生の心づかいの声掛けも学ぶことができた。



●実践事例 新聞紙にローラーで遊ぶ

授業の概要

ひみつ基地で使った新聞紙を再利用し無駄にすることなくつかう。また、画用紙ではなく、新聞紙を用いることで、作品づくりや評価と無縁であることを理解させる。自由にローラーで後をつけて遊ぶ。絵の具は何色か用意しておく。のびのび描くことで、発散や開放によって生じる気持ちを感じとり、そこに小人の冒険を描いていく。

授業の感想 （学生から）

- ・何も考えずに思うまま、のびのびとできる遊びなので、子どもたちにぴったりだなと思った。何気なく出来上がった世界に小人を描くことにより、様々なことが想像できて、一つの世界が完成していくことがとても楽しかった。
- ・ローラー遊び→小人の絵を描くことで、一つひとつの遊びが合わさって展開することの面白さ、楽し

さを発見することができた。一つの遊びをそれだけで終わらせないことによってイメージをさらに膨らませることができると学んだ。

- ・ローラーで意図しない線を引くということで、描画活動に苦手意識を持つ子でも、ためらいが少なく、簡単に自由に思い切りやりはじめることができると思った。ローラーをしっかり握る、手首を動かすなどの操作性も取り入れられていた。また、小人の描き方に個性があり、他の人の作品を見てみたいと思う良い機会であった。
- ・「小人を描く」という事を先に伝えない事で、何も考えず好きなように自分の思いを思いきり出したローラー遊びができた。わら半紙など白い紙を活用してローラーで線を引き小人を描いた方が小人が見やすいかもしれない。大きな模造紙にみんなで線を引き1つの小人の国を作るのも楽しそうだ。
- ・自由にローラーで描くことは意外と難しいことで、`こうしたい`と形を作るのは、私たちが見通しをもって活動しているからなのかなと思った。今を楽しむ子どもたちだからこそ、自由に良い意味でむちゃくちゃに楽しめるんだと感じた。一人ひとりで作るのも楽しいが、生活発表の劇の木や海など、クラス全体でそれこそむちゃくちゃに色をぬるのもいいなと思った。

●実践事例

にじみ絵を楽しむ

授業の概要

スポンジに水を吸わせ、画用紙の両面をなでて十分にしみこませ、画板の上に貼り付ける。赤・青・黄色を水で溶いておき、好きな色を選び、色を置くようにしてにじませて広げ、色をじっくり味わう。筆を洗い、その色がよんでいる色を感じ取り、その横に好きなようににじませてみる。2つの色が引き合い混ざりたがっていると感じたら重ねて混色し、混ざりたがっていないと感じたら第3の色を横ににじませてみる。引き合っていると感じられるところは重ねて混色し、色の誕生を楽しむ。ここでは、具体物を描かないことで内面の表出と心の開放を促した。

授業の感想 （学生から）

- ・にじみ絵をするのは初めてでドキドキした。自分の好きな色の絵の具を水でぬらした画用紙の上にたらし、紙を傾けり、息をふいてみるとジワジワーと色が混ざりととてもきれいにできて驚いた。絵の具の筆で描くのもいいけど、にじみ絵みたいになまたまできた絵を作り上げるのも予想がつかないので、子どもも喜びそうだったと思った。現場に行ったら是非やってみたい。
- ・きれいに広がっていく絵の具にとっても感動した。保育の中でも色々なことに活用できると思うので、アイディアを広げて子ども達と楽しみたいと思う。
- ・にじみ絵をすることで、水の量の調節、絵の具の色、落とす高さ等、様々な発見をしながら作品を作ることができた。
- ・ふわっと色がひろがるのはきっと驚きがあると思った。自分の意思ではなく、自由に広がり色が混ざったりしてけっして同じものができない分、子ども達の個性が出たのしいだろうなと感じた。夏にすれば花火みたいと思う子がいたり、春にすれば花を思い浮かべる子がいて、季節によっても捉え方が違うだろうなと思った。
- ・偶然にできた色の形やにじみ、重なり、混色を子どもの心でどう感じて楽しめるかを実際に行い、に

じんだ形から何を作り出せるか擬似を考えることにも繋げられると思った。

●実践事例

油粘土・紙粘土と遊ぶ

授業の概要

子どもたちは触覚から多くを認識し、視覚や言語と結びつけていく。また、ドロドロやふわふわのものを好み、そうした感触や粘土遊びは心を開放していくが、学生にはなかなか実感できにくい。そこで、子どもたちの触覚的な活動の意味を体験的に理解し、認知面や情緒面にどのような作用があるかを考え、粘土制作技能の獲得の機会にもなればと2種類の粘土を用意しあそびを体験した。

授業の感想 （学生から）

- ・油粘土の重さ、形、丸めたり、引っ張ったり、くっつけたりなど、粘土独特の重さや感触を楽しんだ。紙粘土では自然物とボンドでくっつけたり、小人を作ったりとペンで色づけしたり軽さをつるすことに利用して、作品作りを楽しんだ。
- ・最初は抵抗がある子どももいるかもしれないが、自分の手を使って粘土に触っていく工程により、自然に慣れてくるようになり、何の形もない粘土がいつの間にか自分の作りたいものに変わっていく驚きに子ども達も喜ぶだろうと体験を通して学んだ。
- ・思い思いに伸ばしたり、ちぎったり、丸めたり、くっつけたり楽しかった。粘土と一言に行っても、種類によって手触りや匂い等全然違っていて、子ども達にはたくさんの粘土に触れてほしいと思った。紙粘土は固まるし、作品を残せるので良いと思う。作った小人はお気に入りになった。
- ・油粘土、紙粘土のそれぞれの良さがわかった授業だった。油粘土は、触り続けると余計に手がべたべたになるので、子どもたちの中には「触りたくない」という子も出てくるだろうなと感じた。そういう子どもへの対応も考えていきたいと思った。
- ・丸めたり、穴をあけたり、細くしたりと粘土1つでも指先を細かく使い分け、粘土と触れ合うことがこんなに楽しく大切だと思ひもしなかった。硬さも程よく紙粘土は色もつけることが出来るので、自分の作りたいものに近づけることが出来た。





●実践事例

スチレン版画・紙版画で版の不思議を楽しむ。

授業の概要

絵は描く行為によってイメージを視覚化していくが、版表現の場合はイメージを直接表すことが出来ない。「写す行為」には「どうなるのかな?」「こうなるはず!」というドキドキ感を通過する。それが子どもの知的好奇心を刺激し、予想外の結果が想像力をかきたてる。こうした版表現の魅力を学生も体験を通して感じてほしいとスチレン版画と紙版画の2種類に取り組んだ。

授業の感想 (学生から)

*スチレン版画の経験から (夢の国を描こう!)

- ・スチレン版画は本当に楽しかった。でも、もっと案を考えて前もって準備しておけばよかったとも思った。そうすると更に満足のいく作品になったと思う。子ども達がするときは、発想力を大事にしながら計画性が持てるようなかわりをしたい。
- ・普通の版画より手軽に作れ、子どもが鉛筆を持ち、力加減を調節することを遊びながら知り、鉛筆になれることで小学校への勉強にもつながるのではないかと思った。作品に色がつくとより良いものに見え感動した。
- ・自分でつけた線がどのように浮かびあがるか、仕上がりまで想像できそうでできないところが、面白さだと思った。左右反転するということが幼児には難しいかもしれないが、あらたな表現を示してくれると考えた。又、何色にするか、自分の具合で濃淡が変わるのも達成感の要素だと思う。
- ・版画にすることで、イメージしていたものを裏切る事もあり、そこが楽しみの一つ。やり直しが出来ないことと相まって、イメージしたものを描く集中力と、誤ってできた表現を楽しむ2面性があると思う。
- ・夢の国をテーマに、普段使わない素材で造形するのは新鮮で面白かったし、いい勉強経験になった。やり直しができない分、思い切りする人、慎重にする人がいて面白かった。みんなで色んな作品を見て「おもしろい」「すごい!」と言い合えるのもいいなと思った。

- ・鉛筆で子どもの力でもできる版画、ローラーを使ってインクをつけたり、白黒が反転したりと、子どもに戻ったように楽しく発見も多かった。テーマがあることで子どもの想像力を逆に広げて活用できそうと思う。

*紙版画の経験から（小さかった頃の自分）

- ・自分の子どもの時を思い出しながら作った。子どもの時の話をしたり、聞いたり、とても楽しかったし良い導入だと思った。子ども達とする時は、将来の自分などテーマを変えてすると面白くなるだろうと思う。簡単にできるし、身近な素材を使えるので、実際に現場で子ども達としてみたいと思った。
- ・自分の顔を作る＋小さい頃の写真を見直せる良い題材だと思った。自分の顔を触りながら形を作ったり、その前には写真を持ち寄り、保育士のものも最後に見せたりすると面白いだろうし、保育士も一緒に楽しむことで子どもたちの自己肯定感も深まると思う。
- ・絵が苦手な子どもでも、ちぎって貼るだけで簡単なものができるので、絵に自信がない子にとって、良いなと思った。又、下書きをしないために、ちぎったその時々で完成するのがとても良かった。
- ・自分の顔を改めてよく見てみる、触ってみる、どうだったか表現してみることで、自分の中にあらたな自分を発見することができるのだと考えた。想像で絵を描くことは難しいけれど、自分のことなら一番身近で取り組みやすいと思う。「好きな家族の顔」にしたならプレゼントにいいと思った。
- ・下書きをせずハサミで切って自分の顔を作ることで、とても大胆になることができた。自分の顔をまじまじと見ることや、触る機会はあまりないので変な感じがしたが、子どもにとって、目や眉毛、鼻等のパーツを知るよい機会になるのだなと思った。
- ・小さい時の自分の顔を版画にするのは面白かった。笑っている顔や普通の顔、小さい顔、大きい顔いろんな作品が出来上がって面白いと思った。段ボールなど様々な材料を用意することで、保育の中でやっていても色々な素材に触れながら制作できるので良いと思った。



●実践事例

新聞紙のファッションショー

授業の概要

新聞紙は紙のなかでも身近にあり、入手しやすく、全身で関わるができる材料である。実習中に新聞を使った遊びを展開した学生も多い。この授業の中でも新聞紙を使った遊びを経験しているが、今回はグループ活動による取り組みで、「こんなこともできる」という活動範囲を広げてほしいと、新聞紙のファッションショーに挑戦した。新聞紙の他、紙テープ、すずらんテープ、フラワーペーパー等を使用した。

授業の感想 （学生から）

- それぞれのグループの個性が出ていたファッションショー。グループで試行錯誤して作った服はとても素敵だった。協力して出来るし、みんなの良さを出せるのでとても良かったし楽しかった。新聞紙だけでなく、紙テープやフラワーペーパーなど、いつもとは違った使い方が出来るので楽しさがアップした。
- 普段着ている衣服、憧れの職業の服装、又そういうイメージがなくても、新聞紙の形や作りやすさを生かして作りこめると思った。デザイン、縫製、マネキン役が力を合わせて作り上げ、「見てもらう」という充実感が、子ども一人ひとりを認めることにもつながると思った。
- 各班の個性が出た作品展だった。私はスカートを、私はリボンなどを役割分担しながら共通の1つのものを仕上げることは、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたり、妥協点を探りあうなどの活動が見られた。材料を少なくすることでより工夫が生まれた。又、出来上がりを発表することで達成感が味わえるのではないかなと思う。
- 意見やアイディアを言い合って、1つのものを作るのは面白かった。テーマを決めたら、色々なアイディアが出てきたので、子ども達がしてもとても良いと思うし、楽しめると思った。手先や言葉、表現とか多様な面で子どもの発達を見たり、成長を感じられると思う。参観等で親子で取り組んでも良いなと思った。



●実践事例

共同制作 誕生表

授業の概要

園内の環境を豊かにするためにどの園でも誕生表を掲示している。学生たちも現場に出たらクラスの掲示物として制作する必要があるだろう。しかし、ここで今一度誕生表の意味を考えさせたい。クラスへの所属意識をもつ効果もあるが、その月の誕生児の名前を飾り祝うことが大切である。掲示による効果は装飾と伝達の両面があることを踏まえて、誕生日の掲示のあり方を検討させ、参加型の誕生表を共同制作した。あらたに同じ生まれ月のグループを作り、紙版画で作った顔を再利用した。

授業の感想 （学生から）

- ・この制作をしていて思ったのは、一人では出来ない、色々な人のアイディアが必要だということだ。子ども達が1年間見るものであり、ずっと掲示してあるものだと思うので、保育者同士でどのような誕生表にしたら子ども達が喜ぶのかということを考えていくことが大切だなと思った。
- ・まずみんなの作った紙版画の顔の作品を見せ合って褒め合った。そうしたら、何か嬉しい気持ちになって、この気持ちが子どもを褒めた時に感じてもらえるのだなと思い、褒めることの大切さを思った。大人数でどうしたら良いものが出来るか話し合っ、アイディアを聞きあうことで、本当に良いものが出来て達成感があった。就職してもいいかそう思う。
- ・色々な作り方があるのだなとすごく学べた作品作りだった。一緒に作ると、個人の苦手な分野、得意な分野を見つけ高めて行ける、保育者同士が高め合える機会になるなと思った。
- ・皆で題材を何にするか、どんな大きさにするか、色等決めていくことは連携にもつながると思った。子どもが自分の誕生表を見つけて指差して「ぼくは〇月!あった!」とロ々にする姿が思い浮かび、子どもの一年の成長を壁面で見守ってくれる大切な役割もあるのだなと思った。



●実践事例

冬の制作 織る枝かざり

授業の概要

ひもを使った技能は、結ぶ・編む・織るなどさまざまで、昔から人々の生活を支えてきた。1本のひもが変身をとげる不思議さ、先人の知恵の素晴らしさと作る楽しさを学生たちにも体験してほしいと取り組んだ。秋学期の最初に田村山に行った時拾った木の枝を利用することで、自然物を無駄なく使うことの大切さや、枝に毛糸を結び、巻きつけていくときれいな飾りが出来る簡単な織る作業から感動を味わった。

授業の感想 (学生から)

- ・自然物を採取したものを無駄にすることなく保存しておき使うことで、いろいろな気持ちや景色を感じながら、色のつながりや毛糸の温かさを楽しみつくることができた。
- ・普段落ちているような枝や木を使って身近なものでできる作品なので、子どもたちにもやりやすくて良いなと思った。ただの木の枝だったのが、毛糸を使って巻いていくことで、とても綺麗な枝飾りになり子どもたちも残しておきたくなるだろうと思った。
- ・選ぶ毛糸の太さや色合いによって編んでいく度に見た目が変わっていくのが面白いと思った。自然と人工物の融合や力加減によって様々な模様になるのが魅力だ。また、集中力を必要とするので、子どもの取り組む力を育んだり織り上げた達成感を認めてあげられると思った。
- ・地道な作業の繰り返しだが無心になってやり込めたので、たまにはこのようなじっくり取り組む制作もよいなと思った。私は施設で働くので、お年寄りもこのような作業が好きだと思うので是非取り入れてみたいと思う。
- ・作っていてとても楽しい題材だと思った。毛糸にも色々な種類があって、色んな織る枝かざりができたり、両面する子や枝を増やす子など、私たちがしても様々な作品があって面白かったから、子どもたちがしても楽しく想像力を膨らませて面白い作品ができたり、それを見せ合って認め合ったりできたらいいなと思った。実際に園でするときは、手先が器用でない子の配慮はしっかり考えておこうと思った。
- ・園では、自分たちで拾った木で毛糸を使って織る枝かざりをすると、子どもはよりこの遊びに愛着を持って活動できると考え、保育に生かし取り入れていきたいと感じた。また、わからない所は友だちと教え合ったり助け合える良い活動だと思った。



5. 【考察】

以上の取り組みから、授業の省察や造形表現の実践授業に対する学生の自由記述の回答を整理し考察してみた。

● 田村山ひみつ基地づくり

田村山の基地作りについては、表現という枠にとらわれず自然の中でのびのび取り組む造形活動を楽しんでほしいと、あえて戸外に飛び出して取り組んだ。田村山では登る途中にドングリや松ぼっくりなどが落ちていて、学生も子どもに返ったように歓声をあげて拾い良い経験になった。新聞紙という素朴な材料だけを使い基地作りをしたので、グループによる差がなく、その分話し合っただけで発想豊かなものになった。蜂や蚊などに遭遇して、自然の中で活動する際の安全面についても気が付いて話し合う材料となった。

● 新聞紙にローラーで遊ぶ

画用紙を前にしたとき、学生は何か書かなくてはと緊張して取り組む。そんな作品づくりや評価と無縁であることを感じさせたくて、あえて新聞紙に自由にローラーを走らせた。思いのまま伸び伸びとローラーを動かそうと提案しても、中には萎縮して形ばかりを気にする学生もいて、子どもの気持ちになった時の話し合うきっかけにもなった。自由に描くことが難しいと感じる学生や、意図しないローラーの線で苦手意識を克服できるきっかけになるという学生もいて、複雑な子どもの心理を話し合うことができた。

● にじみ絵を楽しむ

絵の具を使うことで緊張していた学生も、このにじみ絵には思わぬ驚きがあり、出来上がりに満足している様子だった。色を組み合わせる際、引き合っている色は何だろう？という提案に、色を意識しグループごとに色が混ざることに関心をもって取り組んでいた。「うーきれい！」と自然に学生から感嘆の声が上がり、積極的に様々なグループを見に回る姿があった。学生は遊びながら色を学べる、偶然にできた色合いを楽しめるなど子どもの立場に立って感想を伝え合っていた。

● 油粘土・紙粘土と遊ぶ

油粘土は形を作ることにこだわらず、まず指先で穴を掘ったり引っ張ったりして感触を十分に楽しませた。粘土に直接触れることで、手を使うことの大切さに改めて気づいた学生も多くいた。反対に紙粘土は形を作り色を付けたり装飾する面白さに気づき、粘土の特性によって様々な使い分けがあることを学んだ。描画が苦手な学生が、自分の作りたいものが出来上がり子どもの気持ちに寄り添えたと感想を述べていた。

● スチレン版画・紙版画で版の不思議を楽しむ。

スチレン版画はほとんどの学生が初体験で、その分出来上がりの感動も大きかった。鉛筆で簡単に書き込んでいくだけだが、やり直しがきかないことで緊張していた。しかし、書き込むうちに浅く、深くを意識し始め時間をかけた下書きとなった。インクで刷る作業は手間がかかったが、学生たちが自

然に作業を分担してスムーズにこなしていた。この刷る一連の作業もよい経験となった。自分のスケジュールが印刷されると思わぬ出来ばえに声をあげ、白黒の世界観を楽しんでいた。紙版画は幼い頃の自分をテーマにしたことで盛り上がり、幼少の頃を話し合うきっかけにもなった。3色のインクを使うことで個性もでて、かわいらしい楽しい作品作りになった。自由記述に楽しかったので自分の保育でも取り入れてみたいという感想が多かった。

● **新聞紙のファッションショー**

グループで協同作業をすることによって、他の人のアイディアを聞いたり取り入れたりして視野を広げてほしいと取り組んだ。1グループ4、5人であったが、個性豊かな楽しい作品になった。出来上りをファッションショーという形で披露したので、テーマや工夫した点を他のグループに伝えられそれぞれが満足できる結果になった。新聞紙や紙テープなど身近な材料に限定した事で、より工夫された作品になった。学生の中には使う材料について「自分ならばこうしたい、こんな材料も使ってみてはどうだろう？」と前向きに捉えたり、「素朴な材料だからこそ工夫のしがいがあった」とか「参観日に親子でしても面白い」などいろいろな感想を聞くことができた。

● **共同制作 誕生表**

紙版画で作った作品を活かし誕生表作りに取り組んだ。ここでは誕生月の新たなグループを編成することで、学生同士刺激を与えたいと言うねらいもあった。また、誕生表は現場に出たら誰もが経験する制作であるが、何のために必要なのか考えさせる機会にもなればと願った。話し合いに時間をかけて、学生一人一人が主体的にかかわれるように、余裕をもって作業に取り掛かった。協働することの大切さを改めて感じさせたおおきな共同作品になった。

● **冬の制作 織る枝かざり**

15回の講義のうち、14回目にあたる授業で取り組んだ制作である。ほとんどの授業に、1回目に行った田村山で採取した自然物を利用してきた。自然の恵みと共存、そのことを学生自身が体験を通して感じてほしいと取り入れてきた。ここでは、何でも木製の枝を毛糸で巻きつけていくことで季節感のある温かい作品が出来上がった。学生たちもやり始める前と後では取り組む姿勢が変化し、黙々と作業を楽しむ姿が見られた。いくつか作り部屋に飾りたいと持ち帰る学生が多くいた。

6. 【まとめ】

レイチェルカーソンは、「知ることは感じることの半分も重要ではない」と言っている。幼児期の教育・保育においては、自然の中に出かけ、神秘さや不思議さに目をみはる感性を分かち合うことが大切ということ、学生が実感をもって感じ取れる機会を設定することが重要だと考え、実践授業の中に取り入れてきた。第1回目の授業の中で田村山に出かけひみつ基地を作るとき、全員を緑の木立の中に集め田村山に伝わる昔話を読んでみた。読み終わった後一人の学生が「先生見て！」と緑の木々の間から差し込む光を指さして「きれい！」と思わずつぶやいた。開放的な気分になり、学生たちはのびのび基地作りを楽しんだが、どんな立派な基地よりも心から放たれたこの一言こそが、私の喜びであった。

田村山では、15回の授業のスタートにふさわしく学生たちは嬉々と取り組んだが、絵の具や画用紙などを目の前にすると途端に「何するの？」と不安がり苦手意識を訴える学生も多くいた。まずはこの取り組む前の苦手意識を取り払いたいと、材料を絵筆や画用紙からローラーや新聞紙に替え、自由に伸び伸び遊ぶことを楽しんだ。遊ぶ＝楽しい、表現は楽しい行為だという事を出来上がりの作品ばかりに気をとられず、学生自身が作る過程を楽しむことで得るものも大きいだろうと考えた。学生の自由記述のなかにも、「描くのは苦手だけど偶然にできた形をたのしめた。」「今まで形ばかりを気にしすぎていて自由に楽しむことができなかった」等新たな課題を見つけた学生もいた。また、授業の中で自分が表現するだけではなく、園児に対してどのような指導を行えばよいのかを、学生自身に考えさせグループで話し合う機会をもつことによって、学生自身の意識も変わってきた。「これなら簡単で楽しくて子どもたちはきっと喜ぶだろう。」「手先を使うことで小学校につながる」「苦手そうな子どもには傍について見守ってあげるとよい」など自分が体験することで子どもの立場に立った発言が多く聞かれた。秋学期の後半就職もほぼ決まってくると、「楽しかったから、材料を〇〇に変えると乳児でもできるかもしれないのでやってみたい」「園でする時こうしたらいいんだとすごく考えて取り組めた」等、多くの学生が保育者としてどう取り組みたいかという前向きな姿勢を見せてくれた。

しかし、出来上がりの作品を十分なスペースがとれず展示できなかったり、個々の力量を考慮することなく進めることで、集団の力と個人の力がバランスよく出せる協同作品になっていなかった。今後は、集団の力と個人の力をさらに発揮してお互いを刺激し合いながら、保育者になったときの視点も獲得できるような授業にしたい。

子どもたちが毎日の生活の中で様々な表現を楽しんでいるように、学生たちもこの実践授業のアートの世界を楽しんだ記憶が体の中に蓄えられ、遊びや生活の中で現れ保育の世界を豊かにしてくれることを願う。

子ども学科・准教授

【引用文献・参考文献】

- 1) 槇秀子「保育をひらく造形表現」
- 2) 平成29年度全国保育士養成セミナー「子どもの最善の利益を保障する保育者」
- 3) 木谷安憲(2016)保育内容(表現・造形)の共同制作による学園祭構内装飾 川口